越境精神

梅棹忠夫の残したもの 6

小長谷　有紀

核心とらえる視野構築

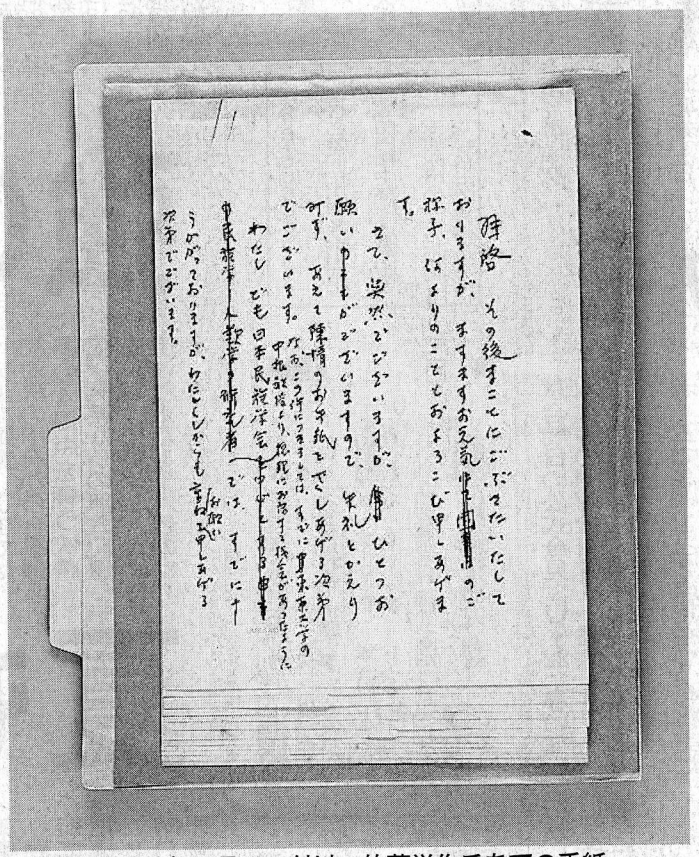
知的インフラ

わたしの勤務する国立民族学博物館、通称みんぱくがそもそも梅棹忠夫の残したものの一つである。梅棹はこれを「知的生産の巨大技術」と呼んだ。研究者が情報を蓄積し、市民がそれを利用する、という知的インフラである。

もちろん梅棹一人でつくったわけではないが、彼がいなければ、このような文化装置をつくるのはもっと難しかったのではないだろうか。何よりも、政治家とのパイプという点で、彼は大きな役割を果たした。

日本で最初の国際博覧会となった昭和45（1970）年の大阪万博と梅棹のつきあいは、東京でオリンピックが開かれた昭和39年にさかのぼる。小松左京らとともに5人で「万国博をかんがえる会」という研究会をつくり、自由なテーマで議論した。当初は、いわば勝手連であったわけだ。

やがて、万博協会ができると、勝手連が「実質的な演出者の役をつとめた」と梅棹は回想している。チーフ・プロデューサーに岡本太郎を推薦したり、いくつもの宣言文を書いたらしい。



昭和45年7月30日付け、佐藤栄作氏あての手紙の草稿。官邸からの要請により、梅棹氏は万博開会式での佐藤氏の挨拶文を起案していた

梅棹アーカイブズには、当時の内閣総理大臣の佐藤栄作氏と、万博協会会長の石坂泰三氏の、挨拶文の起草案が残っている。また、万博成功のさなかに佐藤総理に宛てた手紙の草稿なども残っている。直々に会って話をして、万博の跡地に博物館をつくる最終的な詰めをしたのだった。

このように学者が学問の聖域を越えて政治家との関係を結ぶとき、政治家にとっても同時に越境によって視野の拡大が始まる。

そもそも佐藤と梅棹の仲は、「首席秘書官の楠田實氏のひきあわせによるものであった」と、自伝『行為と妄想』に述べられている。昭和42年、総理の週末休養中の読みものとして、出版されてまもない『文明の生態史観』を総理のカバンの中に入れたことがきっかけとなった。

梅棹の文明論を読んだところで、国会の答弁には何の役にも立つまい。しかし、世界をどう見るか、何のための政治か、という本来の目的にふさわしい知的インフラを脳内に築くことができるだろう。

「人類の進歩と調和」というテーマを構想し、進歩を肯定する宣言文を書く一方で、「このまま進歩がつづけば、われわれはもう破滅するしか道がないのではないか」と感じ、「一種の反文明主義がでてこなければならない」と梅棹は危惧した。そのような長期的な視野あるいは宇宙目線を、わたしたちはいまどのように得ることができるだろうか。

（国立民族学博物館教授）